

橋 善光著 『下北の古代文化』

村 越 潔

本州の北端に鉞のような形状をなす地域があり、それが下北半島である。全国的に見ると、一地方の一半島に過ぎないが、石器時代以来、北海道と本州を結ぶ重要な位置を占めていた。たとえば出土遺物を中心に見ると、本州で生まれ育った各種の土器が、津軽の海を越えて北へ渡り、その地の気風の影響と、在来土器のアレンジを受け、逆移入される折りや、北海道本来の土器が本州へ上陸のさい、最初に踏む地がこの半島であった。

このように、南北文化交流の接点ともいうべき重要な位置にもかかわらず、他の地域に比べてこの種の研究が進んでいたわけではない。戦前の中島全二氏による調査研究のほかは、不幸なことに人を得ずして、遺跡・遺物は大地のなかに眠っていたのであった。戦後になり八幡一郎・江上波夫・江坂輝弥・篠遠喜彦らの諸氏が、北方文化解明の一拠点として当地域を選び、最花・吹切沢・物見台をはじめとする遺跡調査を試みた。しかし旬日程度の調査では、高峰へ挑む登山者のように、問題と相手が余りにも大きく、中腹で休憩のまま今日に至っている。

この在京諸学者の調査の折り、手伝いに加わって小さな土器片も

逃すまいと、細心の注意を払いながら黙々と働く一人の少年があった。遺跡や遺物に関する手解きを受けながら、過去の遠い人びとへの愛情を抱き続け、やがて彼は中央の諸学者の後を継承し、石器時代から近世にいたる先住民の生活解明に乗り出したのである。以後、彼の手掛けた遺跡は二〇箇所を越え、また発表した報告および論考なども、大小併せて六〇を上回るほどになった。その彼が橋善光君である。

このほど約三〇年に及ぶ研究生生活のなかで、とくに心血を注いだ珠玉の論考を一書に纏め、『下北の古代文化』と題して公刊された。人生の半ばに達した時点で、今まで進めて来た自己の仕事を、このように振り返って見るのもまた意義深いことと思う。

本書は五項目に分かれ

一、下北の先史文化

二、縄文文化

三、弥生文化

四、古代文化

五、中世・近世の文化

という構成になっており、一の項目がいわば本書の序論ともいうべき内容で、ナウマン象の棲息時代から室町期にいたる各時代を概観的に網羅し、二以下の各説に対する問題提起を図っている。しかしこれらの各説を目次で追うと、弥生文化の事項が他を凌駕することに気付くであろう。彼がもつともウェイトをかけそして心血を注ぐ時代は、この弥生時代なのである。

わが国の歴史の上で、縄文時代の後に弥生時代が続くということは、もはや動かせない事実である。しかし西暦紀元を境とする前後三〇〇年ほどのこの時代は、確かに編年体の日本歴史の上では存在するにしても、辺境の地までを一律に論ずるには問題がある。かつて山内清男氏が、北日本の当該時代に対して縄文なる用語を与えたのは、それなりに意味がある。近年当地方でも、自由に弥生時代および弥生文化という用語を使用するが、この時代の定義や本質をわきまえてのことであろうか。今更の感もあるが、弥生時代は第一に、稲作農業を開始した初期農耕の時期であり、その証明として炭化米はもちろん、土器に靱の圧痕を有するほか、栽培および収穫用具がなければならぬし、第二は金属器の使用開始時期に当り、これもその製品か、あるいは出土遺物に、使用の痕跡などを示す客観的な証拠がなければならぬ。いまのところ青森県において、以上の条件に弱いながらも一部該当するのは田舎館式土器文化のみであり、現在の段階では、それ以前の土器文化に靱の圧痕が・二見受けられるにしろ、また土器の形態や文様が可成り弥生式的な様相を呈するにしても、まだ内容の面で弥生文化の諸条件が欠如する限り、同用語の使用には問題があると思われる。とはいっても、関東をはじめ、東北南半部に伝播した弥生文化の波及を受けたことは事実であり、したがって用語そのものも、山内氏の提唱した縄文文化、ないしは「弥生的・弥生式的」と称する方が正しいのではなからうか。

下北半島においてこの弥生的な文化が縄文文化の終了後、断絶を

経ずに継続していた事実は否定出来ない。橋君が「東北北部の弥生式土器文化」のなかで述べている如く、型式学上より見て、二枚橋↓八幡堂↓(石蔵)↓念仏間↓九艘泊(平沼)という、土器の編年は正しいであろう。願わくば、この時期の遺跡の特徴が、単一型式のみであるという苦しさはあるにしても、層位的な把握が必要であり、またそれを切に望みたい。この二方面からの裏付けによって、彼の説の正しさは証明されるのである。

前述の如く、本書は彼の長期にわたって発表した論文を纏めたものである。内容に多少の改変はあるにしても、各説の末尾にその発表誌と年月は入れて欲しかったと思うし、また些細なことではあるが、氷期を永期とした校正ミスも見られる。再版の折りには訂正を願いたい。

橋君の積年の努力に対し、書評の筆をとる怠惰の愚生は汗顔の思いがする。しかし、それは偏見に彼の大成を願う心情の発露である点を御理解いただければ幸である。なお一層の研鑽を切望して、この短い書評の筆をおかして頂きたい。

(A5判、本文三四七頁 下北の歴史と文化を語る会刊

頒価 三、三〇〇円)